

佳作

一歩ずつのちから

神奈川県 聖和学院高等学校一年 上羽 悠月

なんと言葉にしてよいのか分からなかった。ただ、悠然とそびえたつ森の王者に見とれていた。

中学三年生の夏、私は母と屋久島旅行に来ていた。屋久島に行くからには、縄文杉を見ておくものだろうと考えていた。けれど、往復十時間かかると聞いて、正直気持ちは乗らなかった。

登山当日になった。ホテルを出たのは午前四時、最初の二時間半はずっとトロッコ軌道を歩くのだが、この時点で、すでに心が折れかけていた。足元の小石をいらだちまぎれに蹴とばしながら、母を置いて一人先を急いだ。振り返らなかった私と母の距離は、実際よりもずっと遠くを感じられた。

耳にこびりつく蝉の声に嫌気がさしてきたころ、何とかトロッコ軌道が終わった。私は適当な岩に腰掛け、ぼんやりとしていたところ、隣に母が座ってきた。渡された水を一口飲んで、私は小さな声で、「ごめん。」

とつぶやいた。母は優しく、

「一緒に来てくれてありがとう。」

と返してくれ、その言葉に胸が熱くなり、心の中が少しずつ整理されていった。

ここから、本格的な山道に入った。木の根を足場にし、岩を避け、溪流を飛び越える。まるで未踏の地を冒険しているような感覚が気分を高揚させる。ただ、ひたむきに歩き続ける。けれど、その高揚感も次第に薄れ、アドレナリンが切れかけたころ、進んでいるのに終わりが見えず、不安が胸に広がっていった。

少し切り替えるためにも、私たちは昼食をとることにした。ベンチに腰掛け少し視線を上げると、辺りは美しい木々でいっぱいだった。この名もなき木々に魅了され、そして今まで気にもとめなかった杉たちもこれほど素晴らしいものだったのだろうと過去の自分が少しもったいないと思った。

再度足に力を込め、天然の階段を登っていく。目に映るもの全てが愛しく思えた。

さらに歩いて、すでに縄文杉を見終えた人たちとすれ違うようになった。一組の登山者たちが、

「あと少しだよ！」

と言葉をかけてくれて、心を奮い立たせることができた。そこから先は、この言葉を励みに登り続けた。

そして、長い道のりの果てに、縄文杉の待つ場所へと足を踏み入れた。空気が一段と静まり返った気がした。足が震えた。感動と疲労が入り混じり、視界がにじんだ。

デッキの階段を一段一段踏みしめながら、近づいていった。

そこには、他を圧倒するような巨木があった。息が止まった。瞬きすらできなかった。悠久の時を経てここに佇むその木に目を奪われた。自分がこの場に立てていることに感動し、感謝した。何千年もの時を生き続けるその生命力に驚嘆し自然の神秘と力強さを知った。そして何よりも、自分の足で歩き、この美しさや苦しみを直に味わえることの喜びを知った。

今でも、行き詰まった時にこのことを思い出す。一歩ずつしか進めない道のりの中で、見えてくる景色がある。あの日の登山が、今の私の歩みにそっと力をくれている。